

○ 聴覚情報の調節

【なぜこの支援が有効になるのか】

特別な支援が必要な子の中には、聴覚過敏で余計な音が気になって必要な音に集中することが苦手な児童がいます。また、耳からの音声情報のキャッチが苦手な児童や、ワーキングメモリ（記憶）が弱く一度に多くのことを聞いても忘れてしまう児童もいます。

教師が音声情報の入力について意識することで、児童が指示を聞き取りやすくなり、困り感を減らすことができます。

〈支援・指導の実践例〉

1. 教室の音声環境の整備

教室内音声刺激を排除することで、整った音声環境をつくることができる。

【刺激になる音の例】風鈴・水槽のエアポンプ・教師のスリッパの音など

2. 教師の明瞭な発問・指示

短く・・・余計な言葉を削る。指示や説明が長くなればなるほど、聞き取りにくくなり混乱するので、指示や説明は言葉を選び短くする。

区切って・・・ダラダラと話が続くと何を聞けばよいか分からなくなったり、聞いたことを忘れてしまったりする児童がいる。少しずつ区切って話すことで、言葉が分かりやすく伝わり記憶にも残りやすくなる。

ゆっくり・・・学年や児童の実態に合わせて、話すスピードを変える。

具体的に・・・「しっかり」や「ちゃんと」等、曖昧な表現は支援が必要な児童には伝わりにくい。「〇回」など、回数を示す。

強調して・・・大切な言葉は声のトーンを強めたり、繰り返したりして強調する。

【例】「教科書の21ページの練習問題3番をノートにちゃんとやりましょう。」

教科書／21 ページ／練習問題**3**。／ノートに／**1**回やります。

（ /で区切り、**太字**を強調。）

3. 視覚情報を一緒に提示する

音声だけの指示だと聴覚入力が弱さのある児童やワーキングメモリが弱い児童は、正確に聞き取ることができないことがある。板書などで、指示や説明のポイントを示すことで、すべての児童に伝わりやすくなる。

【例】（上の指示の場合）

教 P 2 1
練習 3

4. 静の活動時間を保障する

活動中に話しかけられると集中力が途絶えてしまう児童がいる。児童の作業中や活動中に教師が必要以上にしゃべりすぎているか確認する。